H28年度　研究・研修計画

（1）研究テーマ

「創時力」の育成

創時力とは，未来を自分・自分たちで創っていく力

「未来は変えることができる。」これを信じ，疑うことなく,実践を積み重ねていくことが北条小の研究である。

これからの子どもたちには，「自分たちが社会を創っていく」という意識＝「未来への当事者意識」が必要不可欠である。さらに,「自分の思い描く未来を実現したい」という強い思いや「壁にぶつかっても未来を切り開いていこう」とする強い意志や能力も必要である。このような未来を自分・自分たちで創っていくために必要な意識・思い・意志・能力など全てをひとまとめにしたものを「創時力」と定義し,本校の研究テーマを「『創時力』の育成」とした。

なお，本校の研究は教科等における子どもの実態の改善・向上のための研究ではなく，あくまでも未来を見据え，子どもの未来の姿を想定し，その姿に育てるための方策を研究するものである。

（2）テーマ設定の理由

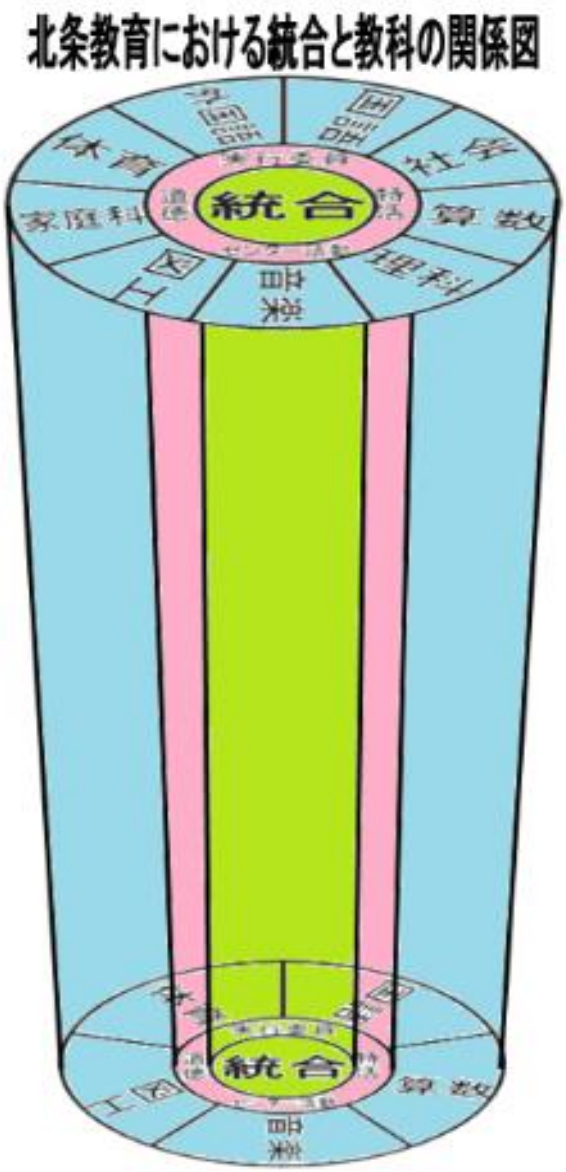
北条教育の流れから

北条教育は，終戦後いち早く「生活教育」を取り入れ，地域社会の中で実体験を重視した実践を積み重ねてきた。以来、急激な社会の変化を捉えつつ,子どもの学習意欲を高め,主体的な学習を保障する考えは一貫している。この間,本校学校教育目標「たくましく現代に生きる子どもの育成」も一貫して設定され,その根底には,地域に根ざした生活教育の理念が脈々と流れている。

子どもの生活を重視した学習の一つとして統合学習がある。統合学習とは，人、自然，社会、文化との関わりの中で，子どもが，自ら企画し，その実現のために，体験や教科で得た知識・技能を生活の場で統合し，こだわりをもった追究や共感し合う一連の活動を重ねて，たくましく，より感性豊かに成長することをねらいとした学習である。このような学習を北条教育の核として進めてきた。

平成２３年度には,「生きたつながりを創造する子どもたちの育成」の研究テーマの下、第１３回公開研究会を開催した。そこでは，異なる個性と学び合い、創造的な活動を通して自己と他者を高めることのできる「生きたつながり」に着目し，研究を深めてきた。

これまでの研究に基づき,これまで以上に変化が急激になっていくと考えられる社会を,「生きたつながり」を支える「個や集団」が,未来を切り開いたり,想定外の出来事にも対応したりすることができる力を身に付けられるようにしたい。



社会情勢から

身近な地域に目を向けると，子どもの減少による学校の統廃合，地方の再生等の問題がある。世界に目を向けるとギリシャ経済，パレスチナ，日本に目を向けると原発，米軍基地移設や集団的自衛権など様々な問題であふれている。

このように,問題が国際化，広域化，複雑化している社会においては,「違いを理解すること」「共通することを見いだすこと」「ひとつの考えに偏ることなくそれぞれをよく考え，ときには，調和のとれた解決方法もしくは，新たな解決方法を考え出すこと」を選択していかなければならない。

これからの社会において特に必要になってくるものは「双極の窮究と調和」というスタンスをもつことであると考える。価値を一つに決めつけず，あらゆる可能性を検討し，最良のものを選択したり，新しい価値を創り出したりすることである。選択したり，新しい価値を創り出したりするためには，それぞれの極「双極」を徹底的に追究「窮究」してよりよい選択，または，新しい方法を考え出す「調和」を図ることが重要になる。

徹底的に追究していくためには,まず,物事に主体的に関わろうとすることが必要になる。来るべき未来をただ待つだけではなく、未来の社会を創っていこうとすることこそ「未来への当事者意識」をもつことであり,社会に主体的に関わろうとすることになると考える。

これからの未来を見据えて

６年生が６年後，１８歳になった時,選挙権をもつことになる。そこには,「自分たちが社会を創っていく」という意識が絶対的に必要となる。これは,遠い未来ではない。選挙で投票するためには,選択または,択一をすることになる。二者択一なら双極を窮究して一つを選ばなければならない。また，いくつもある中から一つまたはいくつかを選び出すなら,それぞれを窮究し,さらに調和を図って選ばなければならない。

「双極の窮究と調和」を実践するための力が,近い未来には必要になってくることが想定される。そのために,未来を自分や自分たちで創っていくために必要な「『創時力』の育成」を研究テーマに設定した。

（３）目指す子ども像

創時力を身につけた子ども

本校の学校教育目標は「たくましく現代に生きる子ども」である。「現代」における「たくましさ」とは、「未来を自分（自分たち）で切り拓くことができる力」と捉え,目指す子ども像を「『創時力』を身につけた子ども」とした。

「創時力」を身につけた子どもとは，未来を自分・自分たちで創っていこうとすることができる子どもである。未来を自分・自分たちで創っていくということは，自分がどうなっていきたいのかという夢や社会がどうなっていって欲しいのかという理想をもち，それを信じて実現しようとすることと考える。また，子どもたち自らが,これから自分たちの生きる時代がどのようになっていくかを想定し，そこで生き抜くことができ，想定できない出来事に遭ってもその状況の中で今の自分にできることを見つけて実行していくことができることだと考える。

（４）「創時力」の核をなす力

前述のような子どもを育むために私たちは創造的発想力・受容的批判的思考力・断行力という特に３つの力をつけることが必要だと考えた。

1　創造的発想力

既習事項や生活経験，既成概念を組み合わせたり，活用したりして，新たな考えを生み出す力。

2　受容的批判的思考力

考えや意見等を受容的立場や批判的立場で検討したり，ものごとを多面的・多角的に視ることで物事の全体像を捉えたりする力。

3　断行力

実行には困難があろうとも，自分で決めたことを強い意志で実行しようとする力・実現する力。

以上の３つの力を自分も他者も高め合う生きたつながりの中で「創時力」を育んでいく。

（５）「創時力」を育成するために

1　未来につながる課題を取り上げた実践

未来につながる課題や問題を繰り返し考えることによって，自分なりの考えをもち，よりよい解決方法を探ろうという態度や未来への当事者意識を育てたい。そして，夢や理想を描くことによって目指す方向を定め，そこに向かって困難があっても未来を拓き，創り出すことができる子どもを育てていきたいと考える。

2　ダイナミックな展開

統合学習と教科学習等におけるダイナミックな展開とは，空間（活動場所,視野）を超えて広がり，時間（オープンな学習時間，過去・現在・未来）を超えて広がっていくように学習を構成することである。そのような学習を行うことで，子どもたちの自由な発想を育てることができると考える。

3　議論・話し合い活動の充実

２つの立場に分けた話し合いや多様な価値観がぶつかるような話し合い，合意形成を図る話し合いを仕組むことで，多様な見方を獲得する。子ども同士がかかわり合い高め合うことで，思考を広げたり，深めたりすることができると考える。

（６）研究組織

- 校長
  - 教頭
  - 研究主任
    - 研究推進委員会
      - 統合学習グループ
      - 教科等学習グループ
        - 国語・社会・算数・理科・音楽・図工・体育・家庭
        - 外国語活動
      - 特別支援グループ
        - 生活単元学習，自立活動
    - 研究推進事務局・公開事務局・プラン事務局

（７）研究の進め方

私たちは「プランＸＩ」にもとづいて，構想を練る。次に実践し，子どもの反応から評価をする。そして修正し，カリ管に納入する。このように，プランＸＩの実践検証を進め，次年度以降の実践者に引き継いでいく必要がある。これがPLAN（計画）－DO(実践）－Ｃheck/Ａct（評価・改善）のプラン実践・検証サイクルである。

プランＸＩ⇒⇒⇒⇒⇒実践・検証⇒⇒⇒⇒⇒修正案　２カリ・デジカリへ

【読む → 指導案作り → 学年で実践 → 反省・修正案 → ２カリ・デジカリへ】

よりよい実践！！

プランＸＩ

ＰＬＡＮ（計画）

①教材研究・・・個人＆研究教科Ｇ・学年会

○教科構想の理解　　○単元の価値，系統性の理論背景の検討

○子どもの実態把握　○主張の確立

②指導案作成・・・個人

○プランＸＩの単元構成の理解・指導案作成

※プランＸＩの完成をもって，すでにそれは修正の対象である。プランＸを実践検証する中で，新たな実践を生み出していく。

③指導案検討・・・研究教科Ｇ（主に教科の本質から）　学年会（主に発達段階から）

ＤＯ(実践)

修正，評価を充実させるため，学年全体で実践することが望ましい。その際，担当者が立てた指導案をもとにするが，クラスの実態に応じてアレンジする。

ＣＨＥＣＫ・ＡＣＴ（評価・改善）

①参観と批評　参観は自由いつでもだれでも自由。参観したら必ず授業研究感想カードを残す。

②実践検討と記録　学年会，もしくは研究教科Ｇで反省をし，修正案を検討する。

③資料の納入　実践者は，資料と共にカリ管に納める。(デジカリにも)

授業研の進め方

・一人１実践の授業研究を行う。

・１，２，３学期に授業研究サイクル（A～D）を設け、研究教科Ｇ、学年Ｇでの研究の場を保障する。

・研究教科Ｇ員は同じサイクル内での実践を極力避ける。

・授業研は同じ研究教科Ｇ員と学年Ｇ員は原則として参観し、協議会にも出席する。

・共通の参観授業や全体会を設け、研究・研修に対する共通理解を深める。

・協力員、講師を要請する。特に、共通参観授業については北条小を理解する立場の協力員だけではなく、参観者を想定した外部の人材を講師に招き，意見をもらう。